

# 29P-am04

地域医療連携における電子お薬手帳の活用に関する研究

○岡崎 光洋<sup>1</sup>, 山浦 克典<sup>2</sup>, 野本 禎<sup>3</sup>, 飯島 伴典<sup>4</sup>, 山浦 知之<sup>4</sup>, 飯島 康典<sup>4</sup>  
(<sup>1</sup>北海道薬大, <sup>2</sup>千葉大薬, <sup>3</sup>東日本メディコム, <sup>4</sup>上田薬剤師会)

【目的】お薬手帳は、患者が服用する薬剤に関する情報提供ツールとして一部の医療機関や薬局で始められた。患者への情報提供の推進を目的として、2000年4月の診療報酬改定で診療報酬で評価され、現在に至っている。しかし全国におけるお薬手帳の普及率は平成22年において約55%程度であり、さらに来局時に必ず持参している患者さんは30%程度という報告もある。お薬手帳を所持する意義を患者に理解いただくと共に、常に携帯できるようなものにする必要があると考えられる。

2010年5月に政府のIT戦略本部が発表した医療IT戦略の一つとして「どこでもMY病院」構想が発表された。本構想は、「国民一人一人が自らの健康医療情報を電子的に管理し、これを医療・介護・健康関連サービス事業者に提示して、どこの病院に行っても、かかりつけ医に準じた診療を受けられる環境の構築を目指す」ものである。そこで、本研究では、常に個人が携帯している携帯電話に着目し、普及が始まっているスマートフォンを用いた、電子お薬手帳アプリを用いて、お薬手帳の電子化と有用性に関する調査を行った結果を報告する。

【方法】(社)上田薬剤師会の会員を中心として、東日本メディコム(株)、(株)メディエイド、KDDI(株)各社の研究支援のもと実施する。「電子版お薬手帳データフォーマット仕様書 Ver. 1.0」(保健医療福祉システム工業会)に基づいてQRコードが印刷される調剤報酬明細書を用いて、薬局店頭においてお薬手帳アプリの利用説明及びQR読み取りに関わる利用説明、及びアンケート調査を行う。